

自著を語る：『満洲語文語入門』

清瀬 義三郎則府

1. 本書の生ひ立ち

昨平成14年6月に、河内良弘先生との共編著で『満洲語文語入門』と題する小著を京都大学学術出版会より上梓しました。その巻頭「はじめに」(pp. vi-vii)に河内先生がお書きになられてゐる通り、本書の前身は、1996年に同じ出版会より刊行された河内良弘著『満洲語文語文典』(清瀬義三郎則府、愛新覚羅・烏拉熙春 助編)で、これが一昨年に品切れとなつたので、それを機に、満洲語の初学者向きとしては分量が多すぎる嫌ひのあつた同書をスリム化し、教科書または独習書風にアレンジして成つたのがこの新版『文語入門』です。定価も半額に近い3,200円になりました。どこにも書きませんでした、旧版『文語文典』の6,200円といふのは、教科書としては学生諸君に少々高すぎたやうでもあつたのです。

さて、旧版の方の『文語文典』は、その「序言」の劈頭に「もう十数年も前になろうか、ふとした縁で私は幾つかの大学で満洲語を教えるようになり、その時々使用する文法書も、周囲に適当なものが見あたらぬため、自分でつくっては受講生に配布することにしていた」(旧版, p.vi)とあるとほり、先づ1980年頃に河内先生が教材にと草稿を起こされたもので、その後も、「で、教室で出会う人々の熱心さに刺激され、必要にも迫られ、毎年春休みの期間の大部分を満洲文字サンプルを切り貼りしたり、文法的解説部分を書き足したり、例文を付け加えたりの作業に費やした」(ibid., pp.vi-vii)と書かれたやうに、年を重ねつゝ書き足して元の原稿を作られたのです。1989年の春に招聘教授として私が、その翌年に招聘外国人学者として愛新覚羅・烏拉熙春女史が、それぞれ京都大学に赴任した折、河内先生の前稿を一冊の文典として纏め上げるお手伝ひをしました。あれやこれやでこれも意外に手間取り、1994年に至つて漸く完成稿を出版会に手渡し、刊行されたのは1996年2月のことでした。

2. 文法篇の用語、構成など

「文法篇」のみは旧版に僅かに手を加へただけで、殆ど割愛することなく新版に収めました。満洲語はツングース語の中の南ツングース語に属しますから、アルタイ諸言語の一つといふ事になります。アルタイ諸言語とはトルコ語、蒙古語、ツングース語の総称であるに過ぎず、これらが系統関係にあるとは証明されてゐません。これら3言語の構造は酷似し文法体系は平行してゐ

ますが、この文法的平行性も系統的(genetic)由来からではなく、地域的(areal)起因に拠るものと考へるべきでせう。とはいへ、共通する「アルタイ型文法」を持つ言語であると言へると思ひます(その意味では、朝鮮語も日本語もアルタイ型文法を持つ言語です)。アルタイ諸言語の文法は、通常、アルタイ学を近代的水準に高めたフィンランド人(但しスウェーデン人の家系)のGustaf J. Ramstedt氏の文法論に依拠してゐます。満洲語も亦、単語は全て用言(verbal)と非用言(non-verbal)に二分され、後者はさらに体言(nominal)と副用語(qualifier)に二分され、次いで云々と下位分類される所なのでせうが、本書の「文法篇」は文法論の展開を意図したものではありませんから、そのやうなことは論じません。あくまでも実用文典を目標に編んだもので、そのためには、ある程度の工夫が凝らしてあります。アルタイ学では、実際の文中に用ゐられた動詞を、その機能から命令形、終止形、連体形、連用形の4動詞形に分類して説きます。たゞ、ウラル諸語と異なりアルタイ諸語では、何らの接尾辞を伴はずに語幹そのまゝが命令形となりますから、それを省いて3動詞形とする見解もあるやうですが、満洲語では不規則動詞にje-fu「食へ」とかo-so「成レ」とかの形があるのですから、矢張り命令形を認めておくべきでせう。終止形とは定動詞で、文末に置かれます。連体形はparticipleの訳語で、名詞の直ぐ前に置かれて之を修飾するものですが、ほかに動名詞(verbal noun)としても用ゐられますから、日本語の(特に文語の)「連体形」と用法が略々同じです。連用形なる用語はconverbの訳語として撰びました。謂はゞ動詞の副詞的用法で、「副動詞」といふ訳語もよく見かけますが、一般の初学者には馴染みの無い呼称なので撰びませんでした。猶ほ、服部四郎先生がまだ東大言語学科の学生だった時、蒙古語を講ぜられた藤岡勝二教授がparticipleを連体形、converbを連用形として教へられた由が先生の随筆集にありましたから、これらの両訳語は昭和初年代には日本のアルタイ学界で既に使はれてゐたものゝ様です。

旧版ではaspectの訳語として「態」を使用しましたが、却つて分かりにくいと考へ、新版には片仮名でアスペクトとしました。アルタイ諸語のアスペクトは、他の言語(ギリシャ語とかロシア語とか)のアスペクトとは別の定義で用ゐられ、多くの場合、非完了、完了、前望の3種類が認められます。日本語では「スル」「シタ」「ショウ」がその3種に該当します。アスペクトは同じ動詞的範疇である時制と密接な関係にあります。満洲語にも時制を表す標識はありませんから、入門書と雖も、否、入門書であるからからこそ、これを「時制」として説くわけには行きません。朝鮮文典もアルタイ学に基づいたものは、アスペクトとして上記の3種を説いてゐます。非完了アスペクトは、その動詞の表す動作が、その時にまだ遂行されてゐない事を示すものです。非完了に相当する概念を、John G. Hangin氏の蒙古文典は‘present and future (現在・未来)’とし、Eleanor H. Jorden女史の日本文典は‘non-past (非過去)’としますが、これらの用語は必ずしも正しくありません。確かに「勉強スル」と言へば、現在“I study”の意味も未来“I will study”の意味も表しますが、それはこの動詞が文の主動詞だからであつて、「(昨日ハ) 勉強スルカラ 断ッタ」のやうに言へば「スル」が過去の件を表してゐます。非完了(non-perfective)が正しい呼称です。或る時点(多くは主動詞の動作の遂行時)を基準として、その時にまだ当該動詞の動作

が遂行されてみなければ非完了アスペクトの形を、既に遂行されてみれば完了(perfective)アスペクトの形を取ります。アスペクトなどと余り耳慣れない術語を使ひましたが、これら二種の用法は日本語の「スル」、「シタ」とそれぞれ同じですから、本書の読者なら容易に理解し得るものと思ひます。

以上の二種に加へて前望(prospective)アスペクトがあります。日本語では「シヨウ」がこれに該当しますから、この形を未来時制と説く文典が誤りである事はお分かりと思ひます。私は'prospective'の和訳語を知りませんでした。言語学辞典の類ひから「前望」なる術語を得ました。その他にも、本書に現れる和訳術語の多くが言語学辞典の類ひに依つたものなのです。格助詞-*deri*によつて表される名詞の格を本書では沿格(prolative case)としました。しかし、この格助詞の表す格は沿格(意味は略々英語の“along”)といふよりtransitive case(同じく“through”)なのですが、この呼称の格が上記数種の辞典類にはどこにも見当らず、その為に日本語で一体どう言ふのか分からず、和訳術語の得られぬまゝに已むを得ず沿格として置いたのです。一部の満洲文典もこの格を沿格としてゐる様です。但し、(川の流れとか道とか)細長い所を表す時のみは「ニ沿ッテ」と訳して良いとしても、*fa deri*と言へば「窓ヲ通シテ」であつて「窓ニ沿ッテ」ではありません。

アルタイ諸言語に接続詞はありません。動詞の連用形が発達してゐて、接続詞のやうな特別な語を必要としないからです。連用形とはconverbの訳語である旨は先述しましたが、抑々この語自体がRamstedt氏の造語で、conjunction(接続詞)のcon-とverbとを合はせて造り上げたものなのです。しかし、本書には敢へて接続詞なる章(pp. 129-133)を設けました。実用文典である以上、英訳すれば接続詞となるやうな語句をこゝに集めて、初学者に平易に学習して貰へるやうにと考へてしたことです。文法論的に言へば、後置詞(pp. 119-128)もその多くが形式名詞であり、動詞の連用形も二三混在してゐますが、これも実用文典たらうとする意図から、敢へて1章が設けてあります。無活用動詞(pp. 113-115)とか助動詞(pp. 116-118)とかも、アルタイ型言語の品詞下位分類の枠外にあります。この辺りは愛新覺羅女史によつて書かれました。わかりやすく学習しやすくとの希ひから、品詞名を(少々無理して)付け、新版にも引続き取り上げました。

この「文法篇」も一般の文法書に倣つて、文法的解説のある毎に当該用例をイタリック体で示した例文が幾つか掲げられてゐます。普通、初学者向きの文法書の例文は、未修の文法形式が含まれない様に細心の注意を以て作文されてゐます。然るに、本章は入門書とは言ひながら、例文は『異域録』、『満洲實録』を始めとして凡て満洲文原典から引かれてゐます(「略語一覧」, p.vii 参照)。従つて、例文にはいろいろな文法形式が既修未修に関係無く出て来ます。例へば、「文法篇」の初めにある名詞の格の解説のところに挙げた例文に、何章か後に学ぶ筈の動詞の条件連用形などか含まれたりしてゐます。そこで、本書を教科書として使ふ場合には若干の工夫が必要となります。極く手短かにその動詞の接尾辞の意味を説くとか(例えば、-*ci*とあつたら「ナラバ」だとか)するのも一方法かと思ひます。因みに、私自身は大阪外国語大学でそのやうに教へてきました。満洲文語は謂はゞ死語なので、編著者による例文の作文は故意に避けたのですから、

これは或る程度致し方の無いことでせう。しかしながら、凡ての例文を原典から採ったといふ事は、本書の大きな長所とも成つてゐると自負してもゐます。即ち、入門書でありながら、同時に参考文献(reference grammar)として既修者のお役にも立てると思はれるからです。特に、本書を以て満洲語の入門を済まされた方々が、参考文献としていつまでも本書を座右に置いてくださるのではないかと、私は密かに期待してゐます。

3. 文字・発音篇と語彙篇と読本篇と

本書の「文字・発音篇」は、「はじめに」に書いてあるやうに旧版をかなりスリム化し、初学者に不必要と思はれる箇所はすべて削除しました。旧版では子音字ごとに、母音と結合して作られる全音節を、単独、語頭、語中、語末に分け、各音節の現れる語例を示した一覧表を掲げたりしました。しかし、先づ各文字の字母表を掲げて語頭、語中、語末の形を示し、各形の現れる語例が列挙されてゐる以上、各音節の用例の一覧表は結局は反復に過ぎないので、それらは凡て新版には省いてあります。各満洲字母ごとに示した行書体も不要なのではと、一度は河内先生ともども考へましたが、行書体で書かれたニシャン・サマン伝を「読本篇」に残すことにしましたので、これは新版にも残しておきました。旧版の方には一字ごとの字母表に、国際音声字母が「基本音」「変異音」と分けて示されてゐましたが、これは全部削除しました。女史の所謂「基本音」だの「変異音」だのが定義不詳で、初学者にも音声学者にもよく分からなかつたからだけではありません。満洲語の現代音なるものは無意味だからです。既に1930年代に満洲の地では、書簡などを満洲語で認めるダグール人や蒙古人はあつても、たゞ書き言葉として用ゐられたのみで、満洲語を話しながら成長した個人は一人も無く、日常の話し言葉としては存在しなかつたとの報告が、服部先生によつて1941年に日本言語学会に出されてゐます。満洲人は一様に漢化し、多くは北京語を母語としてゐるため、たとひ満洲語を学んでも、その発音は母語たる北京語の音韻体系に則つたものであり、kiをch'iと、giをchiとさへ読み始めたのです。もと日本言語学会長で日本ウラル学会長の小泉保先生が十年ほど前に、哈爾濱の満語研究所で二ヶ月の満洲語特訓を受けられた由で、その時の劉景憲先生の発音は、破裂音などが漢語(北京語)式の帯気音と無気音の対立だつたさうです。満洲語の音韻体系では、勿論これが清音(無声音)と濁音(有声音)の対立でなければいけません。この様な次第で、新版には文語音のみを説きました。文語音といつても、母語の話し手(native speaker)が居る訳ではありませんから、多くの部分は諸資料に基づく推定音ですが、かなり正確に推定したつもりです。しかし、満洲文語は死語なのでから、余り音価にこだはる必要はありません。因みに、我々は日本語の古典を読みますが、別に奈良朝や平安朝の発音で読んでゐる訳ではありません。それで一向に差し支へはないのです。

「文法篇」の中の例文掲載の部分は頁を左右に分けて、左方にローマ字満洲文を載せ右方にそ

の和訳文を載せて、原文と訳文を左右に対照しつゝ学べるやうに作られてゐます。朝鮮語の入門書にも、これと同様の体裁を取るものが多く見られます（但しローマ字化はしません）。朝鮮文は、先述したアルタイ型言語の文法的平行性によつて、一語づつ逐語訳を当て嵌めて行くと、殆ど完全な日本語の口語文が出来上がつてしまひます。それ故、文法書に載る例文は、和訳文と見比べれば直ちにどの単語が訳文のどれに当たるかが分かります。おそらくはその所為でせう、上述のやうな左右対照の体裁を取つてゐないものも含め、朝鮮語の入門書の類ひの多くは本書の「語彙篇」に相当するものが附けられてゐません。旧版の『文語文典』には100頁に亙る「満洲語小辞典」が附されてゐましたが、新版には之を収録しない方針を初めから私たちは立てゝみました。ところが、どうもそれでは済まされない様なのです。朝鮮文は逐語訳を順次に施して行けば、結果として現代日本語（口語）が得られますが、満洲文の場合は蒙古語と同じく、逐語訳が古代日本語（文語）に成つてしまふのです。これは今西春秋先生の一連の満和对訳を見る迄もありますまい。本書の「文法篇」に載せた例文には、原文の言はんとする意味をなるべく正確に且つ分かりやすく表現すべく、かなり意識された口語訳が付けられてゐます。その為、どの単語がどれに当たるのか、一見して分からないところが多々あります。本書は読者に初学者を想定してゐますから、例文の一語一語を丹念に逐語的に学ぼうとする人のために、「文法篇」のうち例文に出てくる単語を網羅抽出し、それを「小辞典」に替へて「語彙篇」としました。

「読本篇」は旧版同様に各々見開き2頁を一組とし、左頁には満洲文字で書かれた原文を、右頁にはそれに相当するローマ字文、和訳、語釈、（ニジャン・サマン伝以外は）漢文を載せ、学習しやすいやうに工夫して組まれてゐます。スリム化のため河内先生は、当初、新版には「読本篇」を収めない意向をお持ちのやうでしたが、もし本書が教科書として採択されるなら、少しでも残して置いた方が使用に便利かと思はれましたし、さうして置けば、「文法編」を一応終へられた方が満洲文原典に立ち向かふ前に、その手引きとしてのお役に立てるであらうとも思はれましたので、結局、旧版の頁数の凡そ半分ほどを新版に収録する事にしました。

「読本篇」には見開きの各右頁に語釈が添へてありますが、そこにも解説のない初出の単語は「文法篇」例文の単語に加へて「語彙篇」に収めました。かくて成つた「語彙篇」ですから、結果的にemke「一個」、emte「一ツ宛」があつてjuweke「二個」、juwete「二ツ宛」が無く、susai「五十」、ninju「六十」があつてnadanju「七十」、jakūnju「八十」が無いのですが、それはそれで構はないのです。猶ほ、固有名詞はnikan「漢」、solho「朝鮮」、oros「ロシア」のほか、よく現れるming「明」以外は採録しませんでした。

4. 一つの満洲語教授法、修得法

本書の「あとがき」に、交換教授として渡米された河内先生が、彼の地で満洲語を教へられた

時の経験を語られてゐます。先づ「ブルーミントンにあるインディアナ大学での私の講義は1978年秋から翌年夏までのこと。海外での初めての満洲語講義だけに準備が大変で、なかでも一番気を使ったのは文法。日本人が理解するには何の苦もいらない、このアルタイ系言語の構造を、あちらの学生さんに英語でどう説明したら分かっていたかと思ふと途方にくれた」(p. 221)と、渡米前の講義準備の段階での懸念が述べられてゐますが、次のパラグラフの中程以下には「ところがインディアナ大学では、案に相違して授業はトットトットと進み、あっという間に『満洲実録』第一巻と第二巻が終わってしまい、さすがウラル・アルタイ学部の大学院学生さんだけのことはあり、どだい言語学の素養が違ふと舌を巻いたことだった」(ibid.)とあります。即ち、当初の懸念が杞憂であつたと書かれてゐるのです。「トットトットと進んだのは本当でせう。しかし、それは本当に学生たちの「言語学の素養が違ふ」からだつたのでせうか。それより少し前の1974年までの10年間、私は大学院学生から助教授までをインディアナ大学で過ごしました。ウラル・アルタイ学科(学部)は大学院にのみ所属してゐて、学生は全員が大学院生でした。出身大学もいろいろで言語学科の卒業生が多数を占めてゐましたが、次いで史学科の卒業生が多く、他に宗教学科、地理学科等を出て来た者も居て学生の専攻は区々であり、凡てが言語学の学識豊かだつた訳ではありません。それでは、何故に受講生の皆がいとも素早く満洲語の文法的構造を会得し得たのか、その所以はどうも他の所にあつたやうです。

こゝではウラル学の課程は措きます。アルタイ学の過程で提供されてゐる外国語は、先づポピュラーな言語といふ訳でせうかトルコ語(トルコ共和国語)、ウズベク語、蒙古語(ハルハ蒙古語)が「初級Ⅰ-Ⅱ」「中級Ⅰ-Ⅱ」「上級Ⅰ-Ⅱ」と学期毎に段階的に進み、3年を費やして丹念に学べるやうに仕組まれてゐます。当時は朝鮮語もその様に組まれてゐましたが、其後この言語は廃止となりました。以上のほか、不定期開講のものも含めてトルコ語の領域ではオットマン・トルコ語、チャガタイ語、チュヴァシ語、アゼリ語、カザフ語、トルクメン語、ウイグル語が、蒙古語では古典蒙古語が、ツングース語では満洲語とエヴェンキ語があります。それらの中の或る言語は「中級Ⅱ」までしか無く、また或る言語、特に古典語等は一学期目が「入門」で、二学期目からが「上級講読」です。どうしてその様な藝当が可能なのかと言ひますと、学生は皆上記の数ヶ国語を学んでゐて、古典語等を学ぶ頃にはアルタイ型言語の構造に全く馴れ切つてゐるからです。アルタイ諸言語の語順は、同じくアルタイ型の朝鮮語や日本語を含めても、完全に平行してゐてどれも同じです。しかし、語順が同じであるからとて、同系統である事にはなりません。アルタイ型言語は、語句の中核に当る一次語(または一次要素)が後置され、修飾語などそれに付随する二次語(または二次要素)が常に先行するといふ只一つの法則に支配されてゐるに過ぎないのです。この為、連体節などは常に名詞の前に置かれ、副詞や目的語などは必ず動詞の前に置かれ、主語は動詞句(副詞や目的語を伴ふ動詞)の前に置かれます。文の従属節が必ず主節の前に置かれるのも、前者が文の二次要素、後者が文の一次要素だからです。この法則に支配される限り、いづれの言語も結局は同じ語順を取ることになります。英語のやうに關係代名詞を使つて連体節を名詞の後に置いたり、(becauseなどの)接続詞を使つて従属節を主節の後に置いたり

する言語から見れば、アルタイ型言語の語順は初めこそ奇異に感ぜられるでせうが、学生達はやがてこれにも馴れ切つてしまふのです。

アルタイ語学はscience of suffixes (接尾辞学) だと言はれてゐます。単語の実質的な意味は語幹が表し、接尾辞の添加によつてその語に新しい意味や文法的機能が与へられ、或いは新しい派生語が作られます。一つの語幹に2個以上の接尾辞が添加されることは普通で、種類も多く、極めて重要な職能を担つてゐます。西独ゲッティンゲン大学のGerhard Doerfer先生が1967年秋から翌年の夏まで客員教授としてインディアナ大学に来られ、アルタイ比較文法に加へて「満洲語入門」の講義も担当されました。教室で最初に1枚の満洲文字表を配られ、ほんの30分たらず字母の組み合わせや圈点について説明されたのみで、学生達は忽ちその読み方を会得しました。10名前後の受講者の殆どが蒙古文字かウイグル文字またはその双方を知つてゐたからです。次いで、満洲語の文法は他のアルタイ諸語と大差が無い事、但し人称接尾辞は存在しないことなどを話され、ドイツから用意されてきた(と思はれる)満洲語接尾辞一覧表を配布されたのですが、この一覧表といふのが実に要領よく出来てゐて、表題には“Manchu Suffix Index”とあり、頁を縦に3欄に分けて左方に「接尾辞」、中央に「機能」、右方に「用例」と配置して、都合102個の満洲語接尾辞がアルファベット順に6枚に互つて載せてあるもので、母音調和による変異形は纏めて1個の接尾辞とし、接尾辞の種類(例へば格助詞とか)は記号を以て示してあります。一例を挙げてみますと、左欄に-ndu-とあれば、それが派生接尾辞であると分かります。前後に添へられた二つのハイフンがそれを示す記号なのです。その右側の中央欄にはreciprocal(相互)、cooperative(協同)とその機能が記され、右欄には用例としてaba+la- ‘to hunt’ のやうに語幹とその意味が、次にaba+la-ndu- ‘to hunt together’のやうに接尾辞の附いた形とその意味が、並べて挙げられてゐます。用例中のプラス記号は名詞に添へる接尾辞を示し、末尾に添へられたマイナス記号(ハイフン)は、こゝまでが語幹である事を示します。斯くして所謂「入門」は初日(45分授業)で終了し、次回(週3日授業)からは初日に渡された満洲語の原文を読み始めたのです。恰度その頃Jerry Norman氏が臺北で出した私家版の『滿英辭典』があつて、それを頼りにこの接尾辞一覧表を繰りながら予習して来てゐたので、教室で指名された学生は皆、さしたる誤訳も無く、「トットトット」と読み進みました。それから十余年の時を経て、当時の受講生の一人であつたLarry V. Clark氏がこの一覧表に若干の追加と修正を施して元はDoerfer教授の“Index”である旨を明記し、“Manchu Suffix List”との表題で*Manchu Studies Newsletter* III, 1979-80, pp. 29-40に発表しましたから、御存知の方も多いと思ひますが、未見の方は是非ご参照下さい。

アルタイ諸言語の文法体系は平行してゐると言つても、例へば、先に述べた満洲語のtransitive case(「通格」?)はトルコ語や蒙古語に無い格ですし、逆にトルコ語や蒙古語には具格の形が別にありますが、これは満洲語では属格の名詞にその用法を兼ねさせてゐる等、言語によつて部分的に出入りはあります。しかし、体系としては整然と平行してゐるので、一言語をマスターすると、その類推から直ちに他言語の文法が理解できます。語順と共に、いや遙かにそれ以上に重要なのが接尾辞であることは上述の通りです。普通一つの接尾辞を学ぶ毎にその名称(denotation)

を併せ覚えて行きます。これが実に有効で、満洲語を学ぶ際も、-kū/-ku が agentive suffix (動作主接尾辞)とあれば直ちに“-er, -ar, -or, -ist”を想ひ、また -cibe が concessive converb (譲歩連用形)とあれば、“even if, although”の意味だと、既知のアルタイ型言語からの聯想を働かせて直ぐに合点がいくのです。斯くして譲歩連用形の前に疑問を表す語が来れば“no matter wh-”だと直ちに分かると言ふ訳です。これで「あとがき」に河内先生が「英文術語には特別の思い入れがあり」(p. 221)と書かれた意味がお分かりと思ひます。その様な訳で、巻末の「文法項目索引」には一々に英文術語を附し、「助詞・接尾辞等索引」には夫々の英文名称を附しました。「文法篇」執筆には Doerfer 教授の“Index”を大いに参考にしましたが、接尾辞の名称は一般言語学の用語を勘案したので、同一でないものもあります。

インディアナ大学のウラル・アルタイ学科は、このロマンチックな呼称を捨て、1990年代の半ばに中央ユーラシア学科に変はりましたが、変更は呼称のみであつて教科目等は以前と全く同じです。アメリカに於いて定期的に或いは不定期に満洲語が開講されてゐる大学はそれほど多くはなく、インディアナ大学のほかにはハワイ大学、ワシントン大学(シアトル)、カルフォルニア大学バークレー校、ハーバード大学ぐらゐです。一日で入門を済ませた前述 Doerfer 先生の例は極端であるとしても、アメリカで満洲語を学ぶ学生は主に大学院生で、アルタイ学専攻でなければ大抵シナ学(Sinology)専攻です。後者は、たとひ他のアルタイ諸語を学んでゐなくても、辞書(主として諸橋大漢和)や優れた二次資料(研究成果など)を利用するために、殆ど皆が日本語に通じてゐます。日本語の文法がアルタイ型である事はこれまでに繰返して述べました。この点で、本書の読者は皆が日本語を母語とするのですから、極めて恵まれてゐると言はなければなりません。たゞ、日本で行はれてゐる日本文法は、すべて江戸時代の国学の流れを汲んでをり、「未然形」に始まる用言の6「活用形」が文法の中核を成してゐますから、満洲文法への聯想には難しいところがあります。Ramstedt 氏の文法論の流れを汲み、アルタイ学的文法理論に基づいて書かれた日本文典は、どうも拙著の『日本語文法新論』、おうふう、1989(その英語版は、同じく *Japanese Grammar: A New Approach*, 京都大学学術出版会、1995)しか無いやうです。そこには、アルタイ諸言語と同じく、日本語の動詞(の語幹)は「活用」などしてゐないと書いてあります。いろいろな文法項目でこれが本書の「文法篇」の理解に何らかのお役に立てるやうでしたら、参照して下さい。

5. 本書にこめた期待

旧版『文語文典』の「序言」の末尾に史学者の立場から河内先生が「最近、中国から多くの満文檔案が発見されており、それらが清朝初期の歴史や文化の解明に寄与するところは大きい、それらの読解のためにも本書がいささかでも役立つことができれば幸いである」(旧版, p.vii)

と書かれました。満洲語は日本の言語学者の間でも余りポピュラーではないらしく、例へば文法一般を論じた著述などで、一人称の排他的複数を有する言語としてマライ・ポリネシア語やドラヴィダ語がよく挙げられますが、満洲語には代名詞のbe「手前ドモ」がありながら、殆ど引き合ひに出されません。私は、満洲文語を学ぼうと志す若い人々が少しでも増えてゆくならばとの希ひを罩めて、この小著『文語入門』を上木しました。

これを手初めに蒙古語トルコ語と手を拵けてアルタイ学へと進まれる人々が出るならば、望外の喜びとします。学べば学ぶほど、アルタイ「語族」説に対する疑念が深まることせう。

(ハワイ大学名誉教授)